

明石道峯構付城跡発掘調査報告書

令和6年3月

三木市教育委員会

明石道峯構付城跡発掘調査報告書

令和6年3月

三木市教育委員会

序

播磨東端部に位置する三木市は、加古川より分かれ市内を東西に貫流する美
囊川の豊かな恵みにより、太古より多くの人々が生活を営み、特色ある歴史や
文化を育んできました。

今も市内の各所には、その傍証となる埋蔵文化財が数多く残っています。こ
れら埋蔵文化財は、三木に生きた私たち祖先が歩んできた足跡であり、その歴
史や文化を解明するにかけがえのない財産といえます。このように祖先の
人々が残してきた貴重な埋蔵文化財を適切に保存・調査し、後世の人々に伝え
ていくことが私たちの重要な役目と考えています。

本書は、平成 11・12 年度に三木市教育委員会が実施した^{あかしみちみねがままつげじろあと}明石道峯構付城跡の
確認調査の調査成果を報告しています。

この付城跡は平成 10 年の発見当時、その南半部に都市計画道路が新設される
ことになっており、一部消滅する予定でありました。しかし、教育委員会が工
事事業課と協議を重ね、発掘調査を実施した上で、三木合戦に伴う貴重な遺跡
であると最終的に判断されたことから、当時の関係者の尽力によって保存する
運びとなり、遺跡を迂回するルートに変更されました。その後、「歴史の森公園」
として整備が進められ、現在、麓の谷部にはターゲットバードゴルフコースが
あり、駐車場のほか仮設トイレが備わっています。南西麓から城内に至るまで
散策路が整備されており、憩いの場として活用されています。

この報告書が、三木の歴史の一端の解明に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、現地調査及び本書の作成にあたり、格段のご指導とご
助言、ご協力をいただいた多くの関係者の皆様に対し、厚くお礼を申し上げま
す。

令和 6 年 3 月

例 言

- 1 本書は、平成 11・12 年度に市単独事業として、三木市教育委員会が実施した明石道峯構付城跡の発掘調査の報告書である。
- 2 整理事業及び報告書作成は、令和 5 年度に市単独事業として、三木市教育委員会が実施した。
- 3 調査主体：三木市教育委員会。各年度における調査体制は、次のとおりである。

平成 11 年度

[事務局] 教育長 東野圭司、教育次長 井本智勢子、社会教育課長 藤田剛、文化芸術係長 松村正和

[調査担当] 社会教育課文化芸術係 小網豊

平成 12 年度

[事務局] 教育長 東野圭司、教育次長 小山高良、社会教育課長 藤田剛、文化芸術係長 松村正和

[調査担当] 社会教育課文化芸術係 小網豊

令和 5 年度

[事務局] 教育長 大北由美、教育総務部長 本岡忠明、文化・スポーツ課長 手島三知子

[調査担当] 文化・スポーツ課文化遺産係長 金松誠

- 4 本書の編集は、金松誠が行った。執筆は、当時の実績報告書等をもとに、金松誠が行った。
- 5 挿図のトレースは舟坂祐香（埋蔵文化財調査補助員）が行った。
- 6 本書に使用した地図は、三木市発行の 1/10000 及び 1/2500 都市計画図である。
- 7 本書における方位・座標は、すべて日本測地系によるものを示す。方位は座標北を表し、レベル高はすべて海拔高（T、P）を表す。
- 8 発掘調査で得た出土遺物及び図面・写真は、三木市立みき歴史資料館において保管している。

目 次

序

例言

第1章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

第2節 調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

第2節 調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

第3節 調査の結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

第4節 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

図版

報告書抄録

第1章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

三木市のある兵庫県は、瀬戸内海から日本海に渡って広がる県域である。三木市は、兵庫県の南東部に位置する内陸の都市である。平成17年(2005)10月に北東に隣接する美囊郡吉川町と合併し新たな三木市となっている。東及び南は神戸市、南西は加古郡稲美町、西は加古川市、北西は小野市、北は加東市、北東は三田市と境界を接している。近世以前の旧分国では、播磨国美囊郡に属する。

三木市の地形は、市域の大部分を丘陵・台地・平野で占め、わずかな山地とからなる。市の東部は帝釈山地さらには六甲山地へと続き市の西部は丘陵や台地が広がる。これらの山地や丘陵に水源を發した美囊川や支流である志染川・小川川・淡河川などの美囊川水系は西流し、別所町正法寺付近で加古川に合流する。加古川は瀬戸内海に注ぎ、古くから河川交通が盛んであった。市域はこれらの河川によって形成された沖積平野及び河岸段丘からなる。

丘陵と台地は、市北東部の美囊川より北の小野丘陵、美囊川と小川川に挟まれた吉川丘陵、小川川と志染川に挟まれた細川丘陵、志染川の南に展開する志染丘陵、志染川上流の帝釈山地、市西部の美囊川南岸より明石市・加古郡稲美町へ広がる東播台地の6つの地域に分けられる。これらの丘陵や台地、河川の浸食作用によって形成された開析谷を縫うように有馬道・明石道・兵庫道・姫路道などの陸上交通が発達してきた。

第2節 歴史的環境

三木市において、最も古く人間の行動が確認できるのは旧石器時代である。美囊川を望む段丘上に位置する和田白長大神神社散布地、与呂木宮ノ元遺跡で後期旧石器時代のナイフ形石器が出土している。また、正法寺山頂からナイフ形石器が表採されたほか、戸田遺跡の土坑から角錐状石器が出土している。

続く縄文時代は、与呂木で草創期以前の尖頭器が表採されたほか、金会遺跡から草創期の有茎尖頭器が出土している。また、志染町の宿屋1号墳の墳丘及びその崩落土の中から、中期から晩期にかけての縄文土器が出土しているほか、戸田遺跡の土坑から後期初頭の縄文土器が出土している。

弥生時代は、市西部の美囊川北側丘陵で年ノ神遺跡や和田神社遺跡などの中期から後期にかけての集落が確認されている。また、美囊川と志染川が合流する東側段丘や志染川南側段丘でも、与呂木宮ノ元遺跡や与呂木大畑遺跡、宿原岡ノ下遺跡、小戸田遺跡などの中期から後期の集落が確認されている。

古墳時代になると、台地や斜面地、段丘の至るところに中期から後期にかけて数多くの古墳が築かれるようになる。美囊川と加古川の合流地点、市西部の

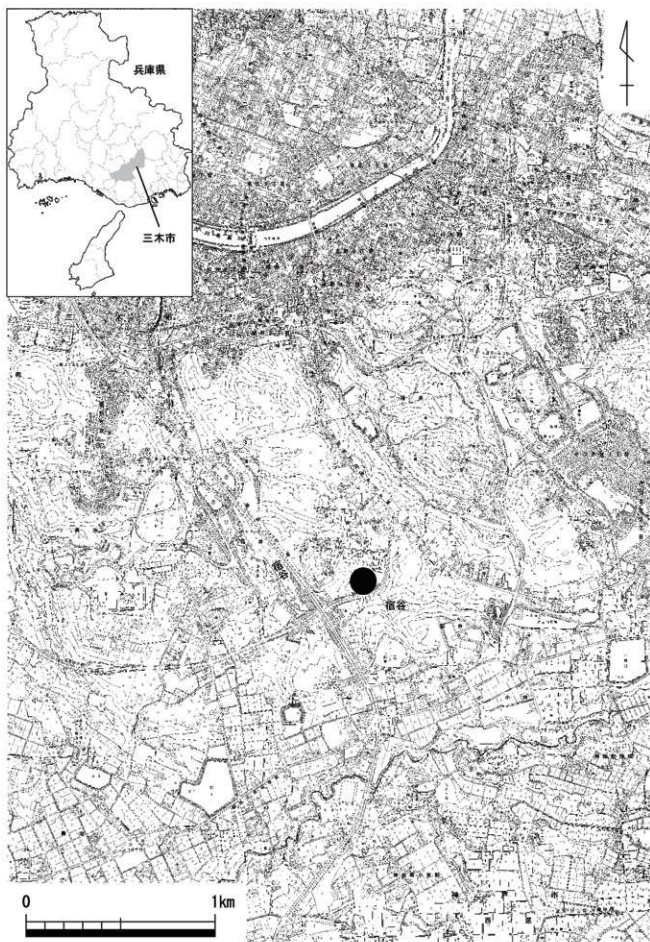


図1 明石道峯構付城跡 位置図

- 三木城
- 1 三木城本丸跡 (史跡)
 - 2 三木城二の丸跡 (史跡)
 - 3 三木城三の丸跡 (史跡)
 - 4 三木城四の丸跡 (史跡)
 - 5 三木城五の丸跡 (史跡)
 - 6 三木城六の丸跡 (史跡)
 - 7 三木城七の丸跡 (史跡)
 - 8 三木城八の丸跡 (史跡)
 - 9 三木城九の丸跡 (史跡)
 - 10 三木城十の丸跡 (史跡)
 - 11 三木城十一の丸跡 (史跡)
 - 12 三木城十二の丸跡 (史跡)
 - 13 三木城十三の丸跡 (史跡)
 - 14 三木城十四の丸跡 (史跡)
 - 15 三木城十五の丸跡 (史跡)
 - 16 三木城十六の丸跡 (史跡)
 - 17 三木城十七の丸跡 (史跡)
 - 18 三木城十八の丸跡 (史跡)
 - 19 三木城十九の丸跡 (史跡)
 - 20 三木城二十の丸跡 (史跡)
 - 21 三木城二十一の丸跡 (史跡)
 - 22 三木城二十二の丸跡 (史跡)
 - 23 三木城二十三の丸跡 (史跡)
 - 24 三木城二十四の丸跡 (史跡)
 - 25 三木城二十五の丸跡 (史跡)
 - 26 三木城二十六の丸跡 (史跡)
 - 27 三木城二十七の丸跡 (史跡)
 - 28 三木城二十八の丸跡 (史跡)
 - 29 三木城二十九の丸跡 (史跡)
 - 30 三木城三十の丸跡 (史跡)
 - 31 三木城三十一の丸跡 (史跡)
 - 32 三木城三十二の丸跡 (史跡)
 - 33 三木城三十三の丸跡 (史跡)
 - 34 三木城三十四の丸跡 (史跡)
 - 35 三木城三十五の丸跡 (史跡)
 - 36 三木城三十六の丸跡 (史跡)
 - 37 三木城三十七の丸跡 (史跡)
 - 38 三木城三十八の丸跡 (史跡)
 - 39 三木城三十九の丸跡 (史跡)
 - 40 三木城四十の丸跡 (史跡)
 - 41 三木城四十一の丸跡 (史跡)
 - 42 三木城四十二の丸跡 (史跡)
 - 43 三木城四十三の丸跡 (史跡)
 - 44 三木城四十四の丸跡 (史跡)
 - 45 三木城四十五の丸跡 (史跡)
 - 46 三木城四十六の丸跡 (史跡)
 - 47 三木城四十七の丸跡 (史跡)
 - 48 三木城四十八の丸跡 (史跡)
 - 49 三木城四十九の丸跡 (史跡)
 - 50 三木城五十の丸跡 (史跡)
 - 51 三木城五十一の丸跡 (史跡)
 - 52 三木城五十二の丸跡 (史跡)
 - 53 三木城五十三の丸跡 (史跡)
 - 54 三木城五十四の丸跡 (史跡)
 - 55 三木城五十五の丸跡 (史跡)
 - 56 三木城五十六の丸跡 (史跡)
 - 57 三木城五十七の丸跡 (史跡)
 - 58 三木城五十八の丸跡 (史跡)
 - 59 三木城五十九の丸跡 (史跡)
 - 60 三木城六十の丸跡 (史跡)
 - 61 三木城六十一の丸跡 (史跡)
 - 62 三木城六十二の丸跡 (史跡)
 - 63 三木城六十三の丸跡 (史跡)
 - 64 三木城六十四の丸跡 (史跡)
 - 65 三木城六十五の丸跡 (史跡)
 - 66 三木城六十六の丸跡 (史跡)

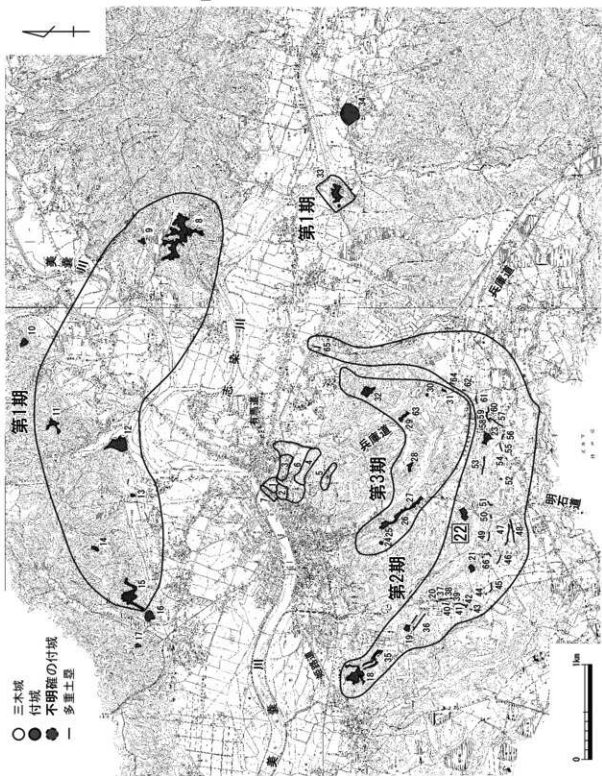


図2 三木城・付城・多重土塁分布図 (昭和42年作成 三木市都市計画図 (S=1/10000)を使用)

美囊川を望む南側及び北側丘陵、志染川の南側丘陵に集中している。前期には市内最大の全長推定 93m の前方後円墳である下石野 5 号墳（愛宕山古墳・三木市指定文化財）が築かれている。

『日本書紀』や『播磨国風土記』などによると、5 世紀後半、第 20 代の安康天皇が殺害されたあと、皇位をめぐる争いから逃れた市辺押磐皇子の二人の王子オケとヲケが日下部連意美に連れられ、志染の石室に身を隠し、縮見屯倉首忍海部造細目に仕えたとされている。のちに弟のヲケが第 23 代額宗天皇に、兄のオケが第 24 代仁賢天皇に即位したとされている。これらの記述から、ヤマト政権の直轄地である屯倉が志染にあったこと、屯倉を管理する地方豪族が存在していたことがわかる。なお、中期から後期にかけては、年ノ神 6 号墳からは三角板革綴短甲、窟屋 1 号墳では金銅装単鳳環頭大刀柄頭が出土しており、ヤマト政権との繋がりが注目されている。

『播磨国風土記』によると、奈良時代の美囊郡には、高野里・枚野里・志染里・吉川里の四里があったことが確認できる。集落遺跡の志染中谷遺跡では、墨書土器が出土していることから、美囊郡衙の候補地の一つと考えられる。この時期には、三木の特色となる窯業生産が始まる。最盛期は 12 世紀の平安時代後期～鎌倉時代初期で、尊勝寺や鳥羽離宮などの院に關係する寺院や邸宅に瓦を供給していたことが確認されている。窯跡は、跡部・久留美・平井・与呂木・宿原・二位谷に分布している。

南北朝時代には、古代からの名刹の伝承をもつ高男寺廃寺跡より、「貞和二期」（1346）銘の入った瓦が出土している。また、三木合戦時の付城跡と考えられる和田村四合谷村ノ口付城跡からは、「嘉暦二年」（1327）銘の入った硯をはじめ、南北朝期の遺物が数多く出土していることから、暦応 2 年（1339）に南朝方の丹生山を北朝方の赤松氏が攻めるために集結した「志染軍陣」の可能性が指摘されている。

室町時代になると、赤松氏が播磨守護を務めている。赤松満祐によって 6 代将軍足利義教が殺害された嘉吉の乱により、山名氏にその座を奪われた。応仁の乱の後、赤松氏は播磨守護に復帰する過程において、三木別所氏の初代則治が台頭していく。則治は、東播磨八郡の守護代に任じられ、15 世紀末頃に三木城を築城したと考えられる。三木城は、本丸・二の丸・新城・鷹尾山城・宮ノ上要害などからなる。本丸では二分する堀を確認し、二の丸からは備前焼大甕群や瓦葺礎石建物跡、堀などの遺構を確認している。

中国地方への進出を図る織田信長は、毛利氏を攻める足掛かりとして天正 5 年（1577）に播磨攻めを家臣の羽柴秀吉に命じた。当初、別所氏の当主長治は織田方に味方していたが、同 6 年 3 月に織田方を離反し、毛利方に与した。織田方は三木城を攻略するために三木城の周囲に付城群を築いて包囲し、兵糧攻めを行った（三木合戦）。付城は毛利氏からの兵糧搬入を阻止するために、状況

に応じて増やされ、約 40 の付城と南側の付城を繋ぐ土塁が築かれた。やがて、三木城内の兵糧が尽き、同 8 年 1 月 17 日、城主長治が自刃して開城した。

その後、織田・豊臣の支配下となり、秀吉の家臣が相次いで城主となった。関ヶ原合戦後は、姫路城主池田氏の家臣が城主となって三木城は存続したが、江戸幕府による元和元年（1615）一国一城令の政策に伴って、廃城となった。

以後、城下の三木町は在郷町と性格を変え、江戸時代中期以降多くの大工職人が三木町に居住したほか、大坂や江戸における大工道具の販売により需要が増えたことで金物職人も増加していき、金物の町として繁栄し現在に至っている。

〈参考文献〉

- 兵庫県教育委員会 1999 『久留美・跡部窯跡群』 兵庫県文化財調査報告第 186 冊
2002 『年ノ神古墳群』 兵庫県文化財調査報告第 234 冊
2002 『和田神社遺跡』 兵庫県文化財調査報告第 238 冊
2009 『宿屋 1 号墳』 兵庫県文化財調査報告第 353 冊
2012 『吉田住吉山遺跡』 兵庫県文化財調査報告第 409 冊
- 三木市教育委員会 2000 『三木市埋蔵文化財発掘調査概要報告書』Ⅱ 三木市文化研究資料第 14 集
2001 『三木市遺跡分布地図』三木市文化研究資料第 17 集
2012 『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書 総括編』三木市文化研究資料第 25 集
2013 『三木市 平成 20・22・23 年度国庫補助事業による発掘調査報告書』三木市文化研究資料第 26 集
2015 『三木市 平成 24～26 年度国庫補助事業による発掘調査報告書』三木市文化研究資料第 29 集
- 三木城跡及び付城跡群学術調査検討委員会 2010 『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書』三木市文化研究資料第 23 集 三木市教育委員会

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成初期の段階で、三木市教育委員会では昭和39年(1964)に兵庫県教育委員会が作成した遺跡分布地図で開発の際の遺跡照会に対応してきた。しかし、開発の増加、特に丘陵地の開発については既成の遺跡分布地図では対応できなくなり、新たに遺跡分布地図を作成するために、平成9年(1997)度から4か年計画で市内遺跡詳細分布調査を東播磨地域史懇話会に依頼した。そして、平成10年度の調査において、新たに発見された遺跡のなかに「福井鶯谷付城」があった。場所は、福井の鶯谷周辺の三木山国有林内で、奥池北側の西へ張り出した尾根に位置している。

以上の報告を受け、三木市教育委員会で現状確認を行い、天保12年(1841)作製の『播州三木城地図』(個人蔵)と照合したところ、規模・形状・位置が絵図に描かれている「明石道峯構」に非常に合致していたため、「明石道峯構」の付城と比定し遺跡名にした。また、付城の現状確認の際、土塁上に測量杭が設置されているのを確認し、開発に伴うものと予想されたため、開発事業の計画について確認を行った。その結果、都市計画道路神戸三木線の新設事業と判明した。計画地内に付城が存在していることを担当事業課である三木市建設部土木課に連絡するとともに、保存を前提とした取り扱い協議を重ね、計画の設計変更で対応する一応の合意を得た。

そこで、平成11年度において、設計変更の協議資料を得るため、道路計画区域と重なっている付城跡の南側について遺跡の範囲確認が必要となり、付城の南側を中心に確認調査を実施することになった。

調査の結果、付城跡であることが確定し、重要な遺跡であることが明らかになったことから、協議の末、平成12年6月に路線変更が決定され、7月1日に「明石道峯構付城」の名称で三木市指定文化財(史跡)に指定された(平成25年3月27日に国指定史跡「三木城跡及び付城跡・土塁」として指定変更)。これにより、三木市企画部企画政策課が“歴史の森”整備事業として明石道峯構付城跡を整備することに伴い、確認調査を実施することになった。

第2節 調査経過

1 平成11年度調査

平成11年7月14日～平成11年8月4日

2 平成12年度調査



図3 明石道壘構付城跡位置図
 (平成9年度作成 三木市都市計画図(S=1/2500)を使用)

平成 13 年 2 月 5 日～平成 13 月 3 月 6 日

第 3 章 調査の成果

第 1 節 遺跡の概要

1 立地

明石道が直下を通過する台地端部に位置する。宿谷に面しており、谷を挟んだ西側の台地端部にシクノ谷峯構付城が配置されている。

2 歴史

三木合戦中盤の天正 7 年（1579）4 月、織田信長の命により、播磨に軍勢が派遣された（『信長公記』）。8 日に、越前衆の不破光治・前田利家・佐々成政・原長頼・金森長近、織田信澄・堀秀政、10 日に丹羽長秀・筒井順慶・山城衆、12 日に信長の嫡男織田信忠のほか、次男織田信雄・弟織田信包・三男織田信孝が出陣している（『信長公記』）。そして、同日に「猪子兵介・飯尾隠岐兩人、播州三木表今度御取御普請の御検使として、相副へ遣はされ候」とあり、猪子兵介・飯尾隠岐が三木方面の付城普請の検使として派遣されている（『信長公記』）。

4 月 18 日、信忠の軍勢は三木方面において別所方の足軽部隊の攻撃を受けたが、数十人を討ち取った（『信長公記』）。26 日には「中將信忠卿、播州三木表に、今度六ヶ所塞々に御取御出仰付けられ」（『信長公記』）とあり、信忠が三木方面において要所に 6 か所の付城を築き、三木城の包囲をさらに嚴重なものとしている。

すなわち、明石道峯構付城跡は、織田方による付城構築の第 2 期に当たる天正 7 年 4 月に織田信忠の軍勢が築いた 6 か所の付城の一つに該当するとみられる（金松 2021）。城主は不明である。

3 構造

主郭Ⅰ・Ⅱ郭（西郭）・Ⅲ郭（東郭）で構成されている（図 4）。主郭Ⅰは、面積約 1100 m²を測る。主郭の周縁を囲む土塁は、曲輪内部からの高さ約 0.2～1 m を測る。東辺の土塁は比較的高く、特に北辺は低くなっている。虎口は、東西（B・C）にあり、虎口 C の南脇に上面約 5 m×約 8 m、高さ約 1 m の櫓台 A が設けられている。

Ⅱ郭は、主郭Ⅰの西側に設けられた曲輪である。この曲輪では、土塁が築か



図4 明石道峯構付城跡 測量図

れていない。外柵形状の虎口であり、主に軍勢の出撃用の空間として機能したと考えられる。

Ⅲ郭は、面積約 3300 m²を測り、主郭の3倍の広さである。元の地形に沿った形状と思われ、周囲に曲輪内部からの高さ約 0.1～0.8mの土塁をめぐらせている。東辺の土塁は比較的高いが、北辺・南辺の土塁は低くなっている。南東・南西に虎口（D・E）が設けられている。虎口Dは、土塁に沿うように屈曲して入る構造となり、南側の屈曲する土塁越しに侵入する敵兵を側面から攻撃することができる。

なお、Ⅲ郭東辺土塁から東へ約 60mのところ幅約 6～11m、深さ約 0.3～0.6mを測る浅い堀状の遺構が南北方向に約 70m延びている。

主郭Ⅰと外柵形状の虎口空間とみられるⅡ郭を本郭部、Ⅲ郭及びその東側の尾根続きを駐屯地とする二重構造の付城と評価できる。シクノ谷峯構付城跡・小林八幡神社付城跡と同様の縄張構造といえる。

第2節 調査の方法

平成 11 年度調査は、計画道路と重なっている付城の南側の範囲確認を中心に行うため、南側の各所に幅 1 m のトレンチを 11ヶ所設定し、人力による遺構検出及び遺構掘削を行った。調査面積は 75.5 m²である。

平成 12 年度調査は、道路の設計変更に伴って、付城の南側の範囲確認調査で検出した主郭Ⅰ・Ⅲ郭東側の堀及びⅡ郭の状況、付城の北側の範囲確認をするために、1 m 幅のトレンチを 5ヶ所設定し、人力による遺構検出及び遺構掘削を行った。調査面積は 30 m²である。

全体の地形測量図は、トータルステーションによる 1/500 で図化し、トレンチ位置を入れた。平面図及び土層断面図は、1/20 の手実測で行った。

第3節 調査の結果

1 平成 11 年度

T 1（図 5）

主郭Ⅰの南西斜面にトレンチを設定した。土塁裾で幅約 1.8mの犬走り状のテラスを検出した。主郭の南辺を土塁に沿って延びているものと思われる。古墳時代の須恵器片が出土した。

T 2（図 6）

主郭Ⅰより南東に延びている細長い尾根の先端を横断するようにトレンチを

設定した。地表下約 0.3mで地山面を検出したが、遺構は検出されなかった。土塁状のものは、自然地形と思われる。遺物は出土しなかった。

T 3 (図 7)

主郭Ⅰの南東斜面にトレンチを設定した。土塁裾で幅約 2.9m、深さ約 0.9mを測る断面がV字状の堀を検出した。土塁の頂点からの高低差は約 3mを測る。遺物は出土しなかった。

T 4 (図 8)

Ⅲ郭の南西斜面にトレンチを設定した。土塁裾で幅約 1.9mの犬走り状のテラスを検出した。土塁に沿って延びているものと思われる。遺物は出土しなかった。

T 5 (図 9)

Ⅲ郭の南端部分の南斜面にトレンチを設定した。土塁裾で幅約 2.2mの犬走り状のテラスを検出した。T 4で検出したテラスの続きとみられ、土塁に沿って延びているものと思われる。土塁は数層にわたって主に明黄褐色土により丁寧に積まれていることが判明した。遺物は出土しなかった。

T 6 (図 10)

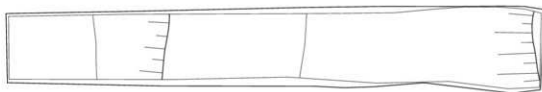
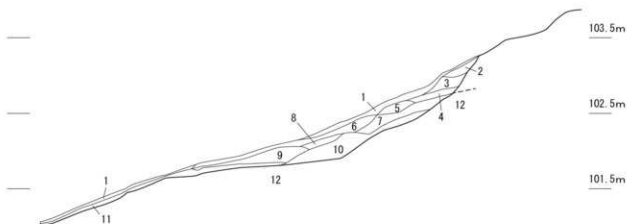
Ⅲ郭の南東斜面にトレンチを設定した。土塁裾で幅約 0.6mの犬走り状のテラスを検出した。T 4・5で検出したテラスの続きと思われるが、T 6の部分でかなり狭くなっている。このテラスの下にさらに2段のテラスを検出した。T 6を設定した場所は、斜面の傾斜が非常に急なので、崩れないようにするための段築構造とも考えられる。土塁は数層にわたって明黄褐色土により丁寧に積まれていることが判明した。遺物は出土しなかった。

T 7 (図 11)

Ⅲ郭東側尾根続きの南へ派生する尾根の先端部分にトレンチを設定した。地表下約 0.2mで地山面を検出した。遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。

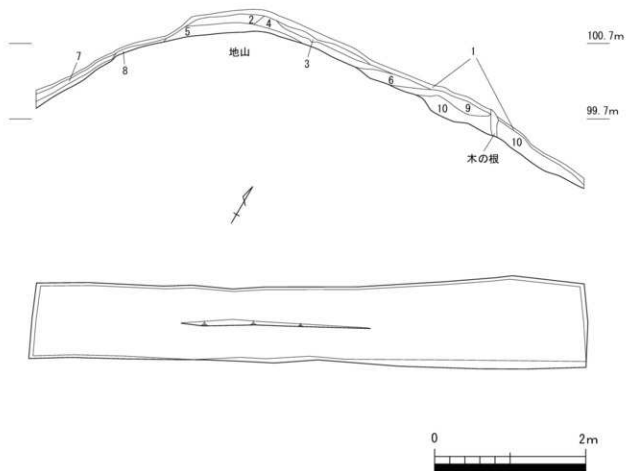
T 8 (図 12)

主郭Ⅰの南端部分の土塁外側の平坦地にトレンチを設定した。土塁裾で幅約 3.2m、深さ約 0.6mの断面がV字状の堀を検出した。T 3で検出したV字状の



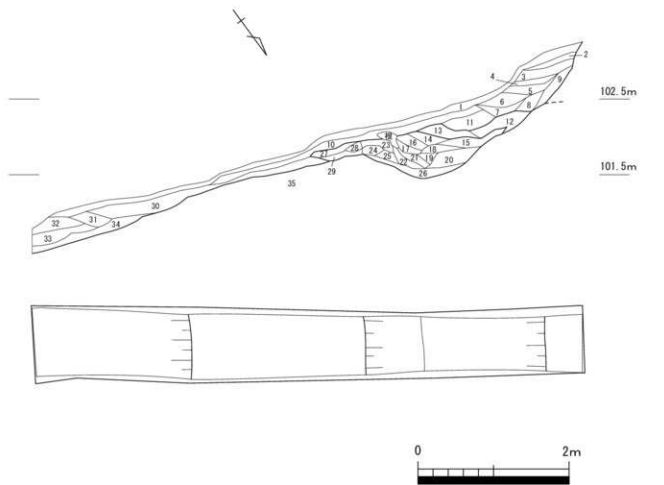
- | | | |
|----|------------------|----------------|
| 1 | 腐葉土 | |
| 2 | 浅黄色土 (2.5YR7/4) | |
| 3 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | 小指大の垂円礫少し含む |
| 4 | 黄褐色土 (10YR5/6) | |
| 5 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | 小指大の垂円礫少し含む |
| 6 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | 小指大の垂円礫少し含む |
| 7 | 黄褐色土 (10YR5/6) | 小指大の垂円礫少し含む |
| 8 | 黄褐色土 (10YR5/6) | |
| 9 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | |
| 10 | 橙色土 (7.5YR6/8) | |
| 11 | 橙色土 (7.5YR6/8) | 小指～親指大の垂円礫多く含む |
| 12 | 明褐色砂礫 (7.5YR5/8) | 〈地山〉 |

図5 T1 平面・断面図



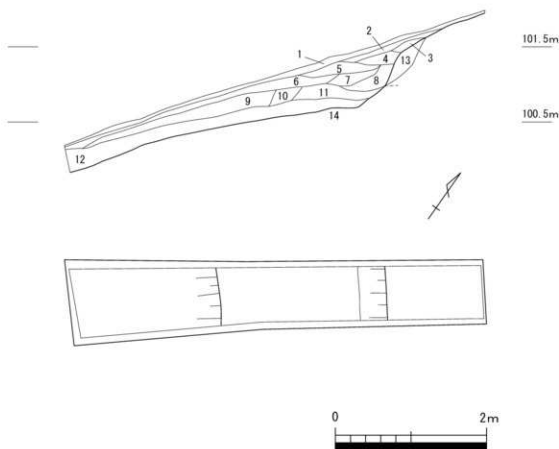
- | | | |
|----|-----------------|-------------|
| 1 | 腐葉土 | |
| 2 | 明黄褐色土 (10YR7/6) | 小指大の垂円礫多く含む |
| 3 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | |
| 4 | 明黄褐色土 (10YR7/6) | |
| 5 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 親指大の垂円礫多く含む |
| 6 | 黄褐色土 (10YR5/6) | |
| 7 | 明黄褐色土 (10YR7/6) | 2の流出土か |
| 8 | 明赤褐色土 (5YR5/8) | |
| 9 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | 親指大の垂円礫少し含む |
| 10 | 黄褐色土 (10YR5/6) | |

図6 T2 平面・断面図



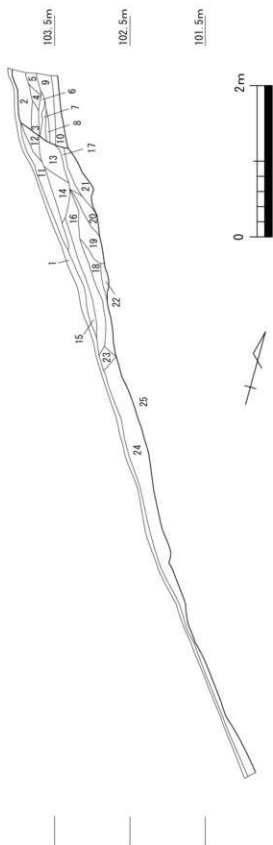
- | | |
|----------------------------------|--|
| 1 腐葉土 | 19 明黄褐色土 (2.5Y7/6) |
| 2 明黄褐色土 (2.5Y6/6) 小指大の垂円礫少し含む | 20 明黄褐色土 (2.5Y7/6) |
| 3 浅黄色土 (2.5Y7/3) 小指大～親指大の垂円礫少し含む | 21 明黄褐色土 (2.5Y7/6) |
| 4 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 22 明黄褐色土 (2.5Y7/6) |
| 5 明黄褐色土 (2.5Y7/6) 小指大の垂円礫少し含む | 23 明黄褐色土 (2.5Y7/6) 小指大の垂円礫少し含む |
| 6 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 24 明黄褐色土 (10YR7/6) |
| 7 明黄褐色土 (2.5Y6/6) | 25 明黄褐色土 (2.5Y7/6) |
| 8 明黄褐色土 (10YR6/6) | 26 明黄褐色土 (2.5Y6/8) |
| 9 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 27 明黄褐色土 (10YR6/6) 小指大から親指大の垂円礫少し含む |
| 10 明黄褐色土 (2.5Y6/6) | 28 明黄褐色土 (10YR6/8) |
| 11 明黄褐色土 (10YR7/6) | 29 明黄褐色土 (10YR6/8) 親指大の垂円礫少し含む |
| 12 明黄褐色土 (10YR6/6) | 30 明黄褐色土 (10YR6/6) 小指大から親指大の垂円礫多く含む |
| 13 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 31 明黄褐色土 (10YR6/8) |
| 14 明黄褐色土 (2.5Y6/6) | 32 明黄褐色土 (2.5Y6/6) 小指大から親指大の垂円礫多く含む |
| 15 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 33 明黄褐色土 (10YR6/6) 小指大の垂円礫少し含む |
| 16 明黄褐色土 (2.5Y6/6) | 34 明黄褐色土 (10YR6/8) 小指大から親指大の垂円礫多く含む |
| 17 明黄褐色土 (2.5Y6/6) | 35 黄橙色土 (10YR7/8) 小指大からこぶし大の垂円礫多く含む (地山) |
| 18 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | |

図7 T3 平面・断面図



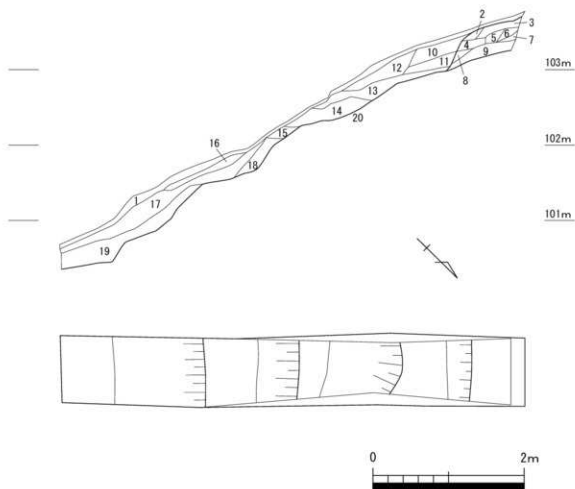
- | | | |
|----|-----------------|-----------------|
| 1 | 腐葉土 | |
| 2 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | |
| 3 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | |
| 4 | 明黄褐色土 (10YR7/6) | 小指大の垂円礫多く含む |
| 5 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | |
| 6 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 小指大の垂円礫少し含む |
| 7 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | |
| 8 | 明黄褐色土 (10YR7/6) | 小指大の垂円礫多く含む |
| 9 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 小指大～親指大の垂円礫多く含む |
| 10 | 浅黄色土 (2.5Y7/4) | |
| 11 | 橙色土 (7.5YR6/8) | 地山の土 |
| 12 | 黄色土 (2.5Y8/6) | 小指大の垂円礫多く含む |
| 13 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | 〈土壘盛土〉 |
| 14 | 橙色砂礫 (7.5YR6/8) | 〈地山〉 |

図8 T4 平面・断面図



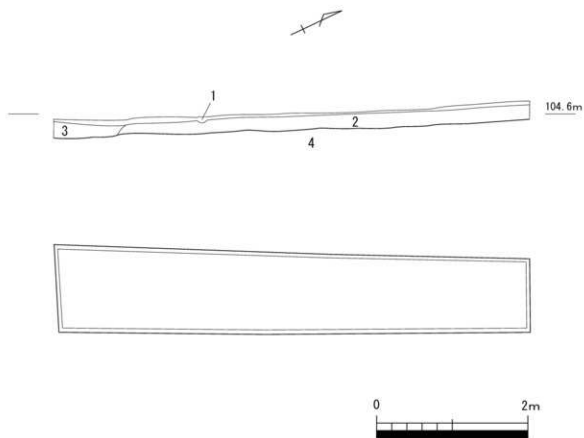
- | | | |
|--------------------|--------------------|-----------------|
| 1 腐葉土 | 14 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 小指大の垂円礫多く含む |
| 2 明黄褐色土 (10YR6/6) | 15 明黄褐色土 (10YR6/6) | 小指大の垂円礫少し含む |
| 3 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 16 明黄褐色土 (10YR7/6) | 小指大の垂円礫少し含む |
| 4 浅黄色土 (2.5Y7/4) | 17 明黄褐色土 (10YR6/8) | 小指大の垂円礫少し含む |
| 5 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 18 明黄褐色土 (2.5Y6/8) | |
| 6 明黄褐色土 (10YR7/6) | 19 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | |
| 7 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 20 明黄褐色土 (10YR6/8) | |
| 8 明黄褐色土 (2.5Y6/6) | 21 明褐色土 (7.5YR5/8) | |
| 9 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 22 明褐色土 (7.5YR5/8) | |
| 10 明黄褐色土 (10YR6/8) | 23 橙色土 (7.5Y6/8) | |
| 11 明黄褐色土 (10YR6/8) | 24 明黄褐色土 (10YR7/6) | 小指大～親指大の垂円礫多く含む |
| 12 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 25 橙色岩盤 (7.5YR6/8) | (地山) |
| 13 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | | |
-
- | | |
|-------------|--------|
| 小指大の垂円礫少し含む | <土壘盛土> |
|-------------|--------|

図9 T5 平面・断面図



- | | | | |
|----|-----------------|------------------|----------|
| 1 | 腐葉土 | | |
| 2 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | | } (土壘盛土) |
| 3 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 小指大の垂円礫少し含む | |
| 4 | 明黄褐色土 (10YR7/6) | | |
| 5 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | | |
| 6 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | 小指大の垂円礫少し含む | |
| 7 | 明黄褐色土 (10YR6/8) | | |
| 8 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | | |
| 9 | 明黄褐色土 (10YR6/8) | 小指大～親指大の垂円礫多く含む | |
| 10 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 小指大～親指大の垂円礫多く含む | |
| 11 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | | |
| 12 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | 小指大～親指大の垂円礫多く含む | |
| 13 | 橙色土 (7.5YR6/8) | | |
| 14 | 明黄褐色土 (10YR7/6) | 小指大～親指大の垂円礫多く含む | |
| 15 | 橙色土 (7.5YR6/8) | 犬走り状のテラス? | |
| 16 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 小指大の垂円礫多く含む | |
| 17 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | 小指大～こぶし大の垂円礫多く含む | |
| 18 | 黄褐色土 (10YR5/8) | 小指大～親指大の垂円礫多く含む | |
| 19 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 小指大～親指大の垂円礫多く含む | |
| 20 | 橙色土 (7.5YR6/8) | (地山) | |

図10 T6 平面・断面図



- 1 腐葉土
- 2 明黄褐色土 (10YR6/8)
- 3 明黄褐色土 (10YR6/6) 小指大の垂円礫多く含む
- 4 橙色土 (7.5YR6/8) 地山

図11 T7 平面・断面図

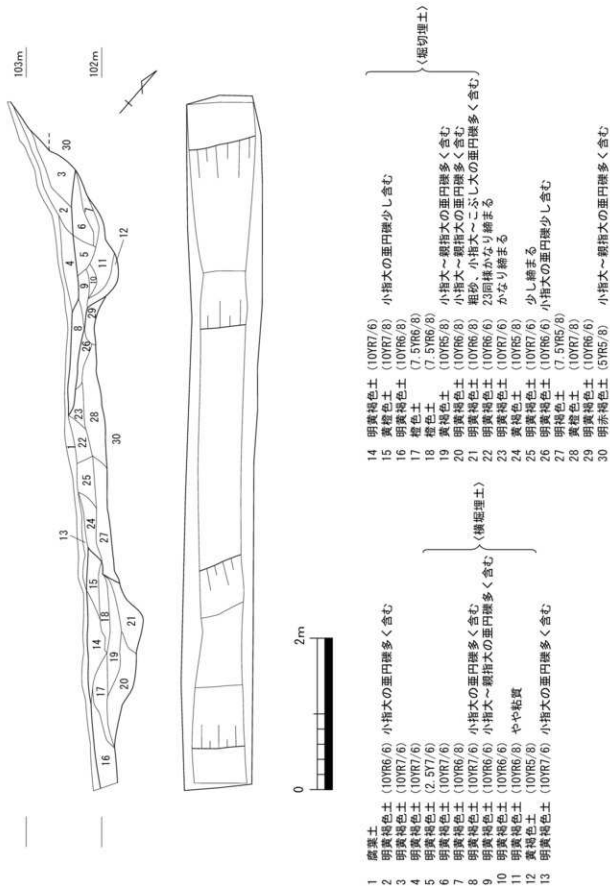
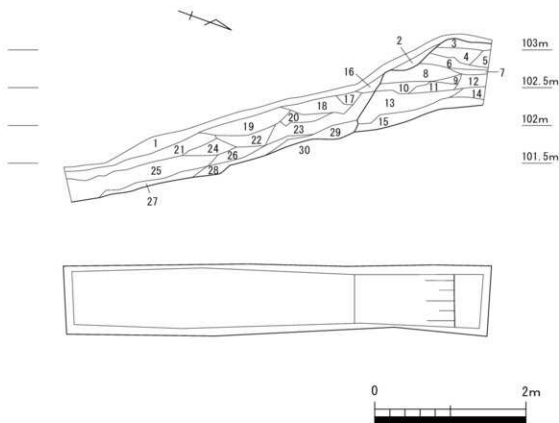


図12 T 8 平面・断面図



- | | | | |
|----|-----------------|------------------|----------|
| 1 | 腐葉土 | | |
| 2 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | 小指大の垂円礫多く含む | } (土壘盛土) |
| 3 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | 小指大の垂円礫多く含む | |
| 4 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | 小指大の垂円礫少し含む | |
| 5 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | | |
| 6 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 小指大の垂円礫少し含む | |
| 7 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | | |
| 8 | 明黄褐色土 (10YR6/8) | 小指大の垂円礫多く含む | |
| 9 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | | |
| 10 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | 小指大～親指大の垂円礫少し含む | |
| 11 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | 小指大の垂円礫少し含む | |
| 12 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | | } (地山) |
| 13 | 明黄褐色土 (2.5Y6/6) | 小指大～親指大の垂円礫多く含む | |
| 14 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | | |
| 15 | 明黄褐色土 (10YR6/8) | 小指大～こぶし大の垂円礫多く含む | |
| 16 | 明黄褐色土 (2.5Y6/6) | | |
| 17 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | | |
| 18 | 黄褐色土 (2.5Y5/6) | 小指大の垂円礫多く含む | |
| 19 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | | |
| 20 | 明黄褐色土 (2.5Y6/6) | 小指大の垂円礫多く含む | |
| 21 | 明黄褐色土 (2.5Y6/6) | 小指大～親指大の垂円礫多く含む | |
| 22 | 明黄褐色土 (2.5Y6/6) | | |
| 23 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 小指大の垂円礫少し含む | |
| 24 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 小指大～親指大の垂円礫多く含む | |
| 25 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 小指大～こぶし大の垂円礫少し含む | |
| 26 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | こぶし大の垂円礫少し含む | |
| 27 | 明黄褐色土 (10YR6/8) | | |
| 28 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | | |
| 29 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 小指大～こぶし大の垂円礫多く含む | |
| 30 | 黄橙色土 (10YR7/8) | 小指大～こぶし大の垂円礫多く含む | |

図13 T9 平面・断面図

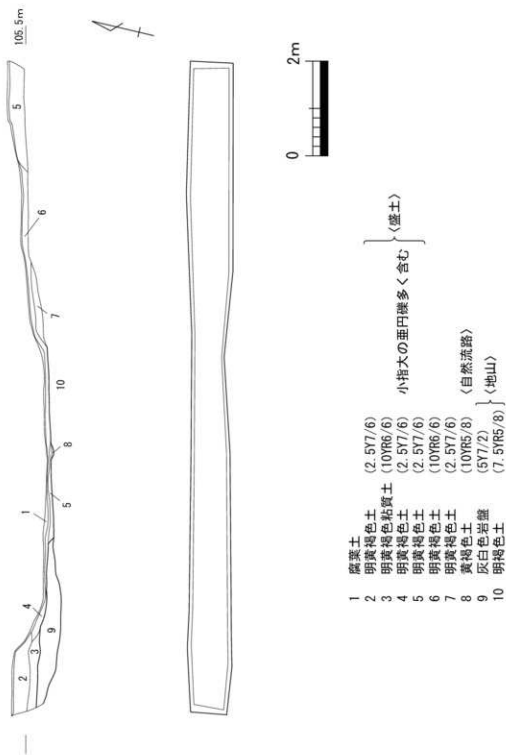
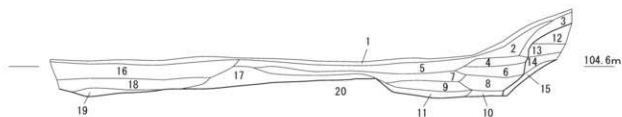


図14 T10 平面・断面図



- | | | |
|----|------------------|-------------|
| 1 | 腐葉土 | |
| 2 | 明黄褐色土 (10YR7/6) | |
| 3 | 明黄褐色土 (10YR6/8) | |
| 4 | 黄褐色土 (10YR5/6) | |
| 5 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | |
| 6 | 明黄褐色土 (10YR7/6) | |
| 7 | 明黄褐色土 (10YR7/6) | 小指大の亜円礫少し含む |
| 8 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | |
| 9 | 橙色土 (7.5YR6/8) | |
| 10 | 明褐色土 (7.5YR5/8) | |
| 11 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | |
| 12 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | } <土壘盛土> |
| 13 | 明黄褐色土 (10YR6/8) | |
| 14 | 黄褐色土 (10YR5/8) | |
| 15 | 明黄褐色土 (10YR6/8) | |
| 16 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | |
| 17 | 明褐色土 (7.5YR5/8) | |
| 18 | 明黄褐色土 (10YR6/8) | |
| 19 | 明褐色土 (7.5YR5/8) | |
| 20 | 明褐色岩盤 (7.5YR5/8) | <地山> |

図15 T11 平面・断面図

堀の続きと思われる。さらにトレンチの南東端で幅3m以上、深さ約0.7mの断面が凹状の堀切を検出した。遺物は出土しなかった。

T 9 (図 13)

Ⅲ郭の虎口Eの西側にトレンチを設定した。土塁は高さ約1.2mを測り、数層にわたって明黄褐色土により丁寧に積まれていることが判明した。T3で検出した堀の続きは検出されなかった。おそらく、堀は主郭Ⅰの土塁に沿って北側へ曲折しているものと思われる。遺物は出土しなかった。

T 10 (図 14)

Ⅲ郭東側平坦地で確認された堀状遺構を横断するようにトレンチを設定した。掘った土を両側に盛って、幅約10.4m、深さ約0.8mを測る堀状遺構が形成されていることが判明した。東側の盛土は高さ約0.3m、西側の盛土は高さ約0.5mを測る。堀状遺構の中央において、幅約30cm、深さ約10cmの溝状遺構を検出した。おそらく自然流路と思われる。遺物は出土しなかった。

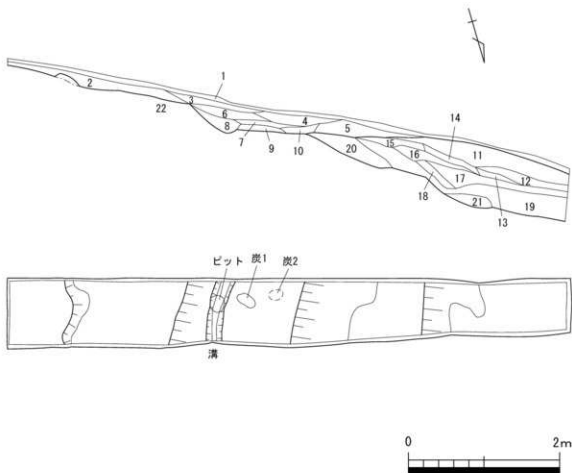
T 11 (図 15)

Ⅲ郭の虎口D付近の土塁外側にトレンチを設定した。土塁裾で幅約2m、深さ約0.5mの断面が凹状の堀を検出した。土塁に沿って北側へ延びて横堀になっているものと思われる。土塁は数層にわたって主に明黄褐色土により丁寧に積まれていることが判明した。遺物は出土しなかった。

2 平成12年度

T 12 (図 16)

Ⅱ郭西側にトレンチを設定した。地山面を削平して形成された3段からなる段状遺構を検出した。T6でも同様の遺構を検出しており、おそらく急斜面の部分の土留めのための段築と思われる。1段目の落ち裾で、幅約20cm、深さ約5cmの溝及びピットを検出した。横板を這わせていた跡と考えられ、これも土留めのためのものと思われる。溝の西側ではピット状の炭1・2を検出した。また、断面の土層の堆積状況から、2段目西側は盛土(11～21層)によって造成されているとみられる。すなわち、3段目の削平面については、盛土造成するためのものであったと判断できる。遺物は出土しなかった。



- | | | | |
|----|--------|------------|--------------------------|
| 1 | 腐葉土 | | |
| 2 | 明黄褐色土 | (10YR6/6) | |
| 3 | 黄褐色土 | (10YR5/8) | |
| 4 | 明黄褐色土 | (10YR6/6) | |
| 5 | 褐色土 | (10YR4/6) | 小指大の垂円礫多く含む |
| 6 | 黄褐色土 | (10YR5/6) | |
| 7 | 明黄褐色土 | (10YR6/6) | |
| 8 | 明黄褐色土 | (10YR6/8) | |
| 9 | 橙色土 | (7.5YR6/8) | 地山の土 |
| 10 | 明赤褐色土 | (5YR6/8) | 小指大の垂円礫多く含む |
| 11 | 明黄褐色土 | (10YR6/6) | 小指大～親指大の垂円礫多く含む |
| 12 | 明黄褐色土 | (10YR6/6) | |
| 13 | 明黄褐色土 | (10YR7/6) | 小指大の垂円礫多く含む |
| 14 | 明黄褐色土 | (10YR7/6) | 親指大の垂円礫多く含む、13より粒子が大きい |
| 15 | 明黄褐色土 | (10YR6/6) | 小指大～親指大の垂円礫多く含む |
| 16 | 明黄褐色土 | (10YR7/6) | 小指大～親指大の垂円礫多く含む、やや砂質 |
| 17 | 明黄褐色土 | (10YR7/6) | 親指大～こぶし大の垂円礫多く含む、砂質かなり強い |
| 18 | 明黄褐色土 | (10YR6/6) | 親指大の垂円礫少し含む、砂質かなり強い |
| 19 | 明黄褐色砂礫 | (10YR7/6) | |
| 20 | 明黄褐色土 | (10YR6/6) | 小指大～親指大の垂円礫少し含む |
| 21 | 明黄褐色砂礫 | (10YR6/8) | 地山の土 |
| 22 | 明褐色砂礫 | (7.5YR5/8) | 〈地山〉 |
- } 〈曲輪造成土か〉

図16 T12 平面・断面図

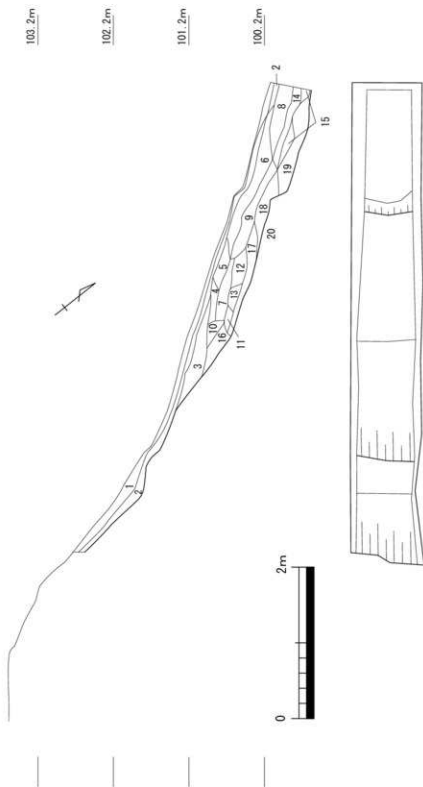
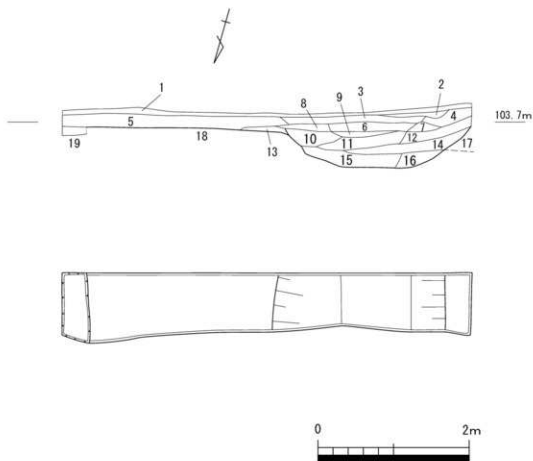


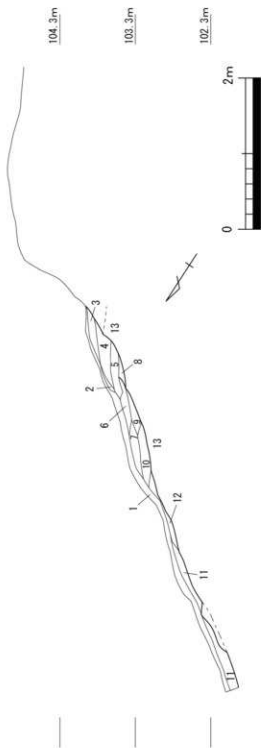
図17 T13 平面・断面図

1	腐葉土	(10YR4/4)	小指大の垂円礫を多く含む	11	明黄褐色土	(10YR6/6)	小指大～親指大の垂円礫を少し含む
2	褐色土	(10YR6/6)		12	明黄褐色土	(10YR6/6)	小指大～親指大の垂円礫を多く含む
3	明黄褐色土	(10YR5/6)		13	明黄褐色土	(2.5Y7/6)	親指大の垂円礫を多く含む
4	黄褐色土	(10YR5/6)	小指大の垂円礫を多く含む、4よりやや粘質	14	明黄褐色土	(10YR6/6)	親指大～こぶし大の垂円礫を多く含む
5	黄褐色土	(10YR4/6)	小指大～親指大の垂円礫を少し含む	15	明黄褐色土	(10YR6/6)	小指大の垂円礫を多く含む
6	褐色土	(10YR4/6)		16	明黄褐色土	(2.5Y7/6)	10より粘質が強い
7	明黄褐色土	(10YR6/6)	やや粘質が強い	17	明黄褐色土	(10YR6/6)	小指大～こぶし大の垂円礫を多く含む
8	黄褐色土	(10YR5/8)	小指大～親指大の垂円礫を多く含む	18	明黄褐色土	(10YR6/6)	小指大～こぶし大の垂円礫を多く含む
9	明黄褐色土	(10YR6/6)	3より粘質が強い	19	黄褐色土	(10YR7/8)	小指大の垂円礫を多く含む
10	明黄褐色土	(10YR6/6)		20	黄褐色砂礫	(10YR7/8)	(地山)



- | | | |
|----|------------------|--------------------------|
| 1 | 腐葉土 | |
| 2 | 褐色土 (10YR4/6) | 小指大の垂円礫を多く含む |
| 3 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | |
| 4 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | 3よりやや粘質が強い |
| 5 | 明黄褐色土 (10YR7/6) | |
| 6 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | 小指大の垂円礫を多く含む |
| 7 | 黄色土 (2.5Y7/8) | 小指大の垂円礫を少し含む |
| 8 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | 6より粘質が強い |
| 9 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | |
| 10 | 明黄褐色土 (10YR7/6) | |
| 11 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 親指大の垂円礫を多く含む |
| 12 | 明黄褐色土 (10YR7/6) | 親指大の垂円礫を少し含む |
| 13 | 黄褐色土 (10YR5/6) | |
| 14 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 親指大～こぶし大の垂円礫を少し含む |
| 15 | 明黄褐色土 (10YR6/8) | 親指大の垂円礫を少し含む |
| 16 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | |
| 17 | 明黄褐色土 (10YR7/6) | 小指大～こぶし大の垂円礫を多く含む (土壘盛土) |
| 18 | 明褐色土 (7.5YR5/8) | 〈遺構面〉 |
| 19 | 明褐色砂礫 (7.5YR5/8) | 〈地山〉 |

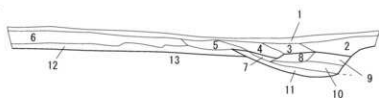
図18 T14 平面・断面図



- | | | | |
|----|--------|------------|-------------------|
| 1 | 腐葉土 | (10YR4/4) | 小指大の垂円礫を少し含む |
| 2 | 褐色土 | (2.5Y7/6) | 小指大～親指大の垂円礫を多く含む |
| 3 | 明黄褐色土 | (2.5Y6/6) | 親指大の垂円礫を少し含む |
| 4 | 明黄褐色土 | (10YR7/6) | 小指大の垂円礫を多く含む |
| 5 | 明黄褐色土 | (10YR6/6) | 親指大の垂円礫を多く含む |
| 6 | 明黄褐色土 | (10YR5/6) | 親指大の垂円礫を少し含む |
| 7 | 黄褐色土 | (7.5YR4/6) | 小指大～親指大の垂円礫を多く含む |
| 8 | 褐色土 | (7.5YR5/8) | 砂質が強い |
| 9 | 明褐色土 | (10YR7/6) | 小指大の垂円礫を多く含む |
| 10 | 明黄褐色土 | (10YR5/6) | 9に近い、小指大の垂円礫を多く含む |
| 11 | 黄褐色土 | (7.5YR4/6) | (地山) |
| 12 | 褐色土 | (5YR5/8) | |
| 13 | 明赤褐色砂礫 | | |

図19 T15 平面・断面図

105.7m



- | | | |
|----|-----------------|------------------|
| 1 | 腐葉土 | |
| 2 | 黄褐色土 (10YR5/6) | 小指大～親指大の垂円礫を多く含む |
| 3 | 明黄褐色土 (2.5Y6/6) | |
| 4 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 粘質が強い |
| 5 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | |
| 6 | 明黄褐色土 (10YR7/6) | |
| 7 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | 5より粘質が強い |
| 8 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 砂質が強い |
| 9 | 明黄褐色土 (2.5Y7/6) | 粘質が強い |
| 10 | 明黄褐色土 (10YR7/6) | 8・9より砂質が強い |
| 11 | 明黄褐色土 (10YR6/8) | 小指大の垂円礫を多く含む |
| 12 | 明黄褐色土 (10YR6/6) | |
| 13 | 橙色土 (7.5YR6/8) | 〈地山〉 |

図20 T16 平面・断面図

T13 (図17)

主郭Ⅰの北辺土塁の外側にトレンチを設定した。土塁の流出土が約0.5m堆積していたことが判明した。土塁外法の傾斜が比較的急峻になっている。遺物は出土しなかった。

T14 (図18)

主郭Ⅰの東辺土塁の外側にトレンチを設定した。土塁の裾で幅約2.6m、深さ約0.6mの断面が凹状の堀を検出した。主郭Ⅰの東辺土塁に沿って堀が存在し、横堀になっているものと思われる。出土遺物は、土塁の流出土の中から、平安時代後期～鎌倉時代初期の須恵器塚の口縁部の破片が1点出土した。

T15 (図19)

Ⅲ郭の北辺土塁の外側にトレンチを設定した。約0.1～0.3mの土塁の流出土が堆積していたことが判明した。土塁は地山からの高さが約1.2mを測り、T13同様、土塁の法面が急峻に構築されているのが確認された。遺物は出土しなかった。

T16 (図20)

Ⅲ郭の東辺土塁の外側にトレンチを設定した。土塁の裾において幅約1.6m、深さ約0.3mの堀を検出した。南側の延長上のT11で検出した堀と一連のもので横堀と判断できる。遺物は出土しなかった。

3 小結

発掘調査結果を曲輪ごとにまとめる。主郭Ⅰについては、東辺・南東辺土塁外側のT3・8・14において、横堀が検出された。横堀は、土塁に沿って築かれており、虎口を挟んで東辺南側にも延び、南東辺の横堀につながると考えられる。主郭Ⅰの南東に続く尾根筋において堀切が検出されており、城外からの敵兵の侵入を防ぐ役割を果たしていたと考えられる。T1で犬走り状テラスが検出されていることから、横堀は南辺には続かなかったといえる。

Ⅱ郭については、T12では、曲輪の先端部分で3段の段状遺構が検出された。1段目の落ち裾で土留め用の横板を這わせていたとみられる溝が検出されている。3段目の上は盛土造成されており、実質は2段構成となっている。地山をある程度平坦化することにより、造成土が崩落しないようにしたものといえる。

Ⅲ郭については、東辺土塁外側は、北側のT16及び南側のT11において、横

堀が検出された。土塁とともに東側からの敵兵の侵入を防ぐ役割を果たしていたといえる。南辺土塁外側のT4・5・6においては、犬走り状テラスが検出された。特にT6では3段になっており、崩落防止を意図したものといえる。

なお、Ⅲ郭から東へ約60mの尾根上に位置する堀状遺構については、T10の調査成果により人工的に形成されたものであったことが判明した。これについては、同じく三木合戦時の織田方の陣城とみられる野村城（加古川市八幡町）にも同様の遺構がみられることから、軍勢の駐屯地を区切るための遺構の可能性も考えられる。しかし、尾根を縦断するなど城郭遺構として違和感も残ることから、後世のものである可能性も否定できない。

第4節 まとめ

明石道峯構付城跡は、天正7年（1579）4月に織田方によって築かれた6か所の付城の一つと考えられる。これら付城は、櫓台を備える土塁囲みの主郭に、複雑な虎口が設けられているものが主流である。周囲に軍勢の駐屯用の曲輪を付属させるなど、主郭に対して求心的な構造を基本とする。これらは、毛利方が明石浦魚住から三木城へ兵糧を搬入するのを防ぐための最前線であることから、より高度な築城技術が用いられた。

これら付城群は、基本的に三木城側から見て宿谷の外側の平坦な台地上に立地し、付城間を多重土塁で連結しているが、当城のみが宿谷の内側に立地し、多重土塁と連結していない。それについては、当時の幹線道路である明石道を押さえる必要があったため、このような立地になったのであろう。特に明石道側に堀や犬走り状テラスなど防御施設を効果的に設けたものと考えられる。

なお、付城の時期の遺物が出土していないことについては、調査面積が少ないこともあげられるが、今まで発掘調査が実施された付城からの遺物の出土が極めて少なかったことを照らし合わせると、付城の臨時性や三木合戦の後も各地に転戦予定があるなど、遺物が残りやすい条件があったと考えられる。

〈参考文献〉

- 金松誠 2021 『秀吉の播磨攻めと城郭』 戎光祥出版
- 金松誠・廣井愛邦 2010 「三木城跡・付城跡群・多重土塁の発掘調査成果」『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書』三木市文化研究資料第23集 三木市教育委員会
- 三木市教育委員会 2000 『平成11年度 社会教育活動状況報告書』
- 2001 a 『三木市遺跡分布地図－三木市内遺跡詳細分布調査報告書－』

三木市文化研究資料第 17 集

2001b 『平成 12 年度 社会教育活動状況報告書』

2007 『シクノ谷峯構付城跡・高木大塚城跡』三木市文化研究資料第
19 集

あとがき

このたび、明石道峯構付城跡の発掘調査報告書をようやく刊行することができた。この遺跡は、発掘調査を実施した上で、道路計画を変更し、市指定史跡に指定した上で整備をし、保存活用を図ってきた。しかし、当時の発掘調査担当者が退職したこともあり、国指定史跡に格上げされたにも関わらず、長らく報告書作成に取り掛かることができなかった。

ただ、調査成果をこのまま眠らせ続けることは、学術的な側面からみても不適切であり、その成果を広く周知すべきであると判断し、このたびの報告書刊行となった。

全体的な遺構の解釈、特に土層断面図の層位や土色については、当時の担当者の解釈を尊重し、修正については最小限にとどめている。この点については、ご了承いただきたい。

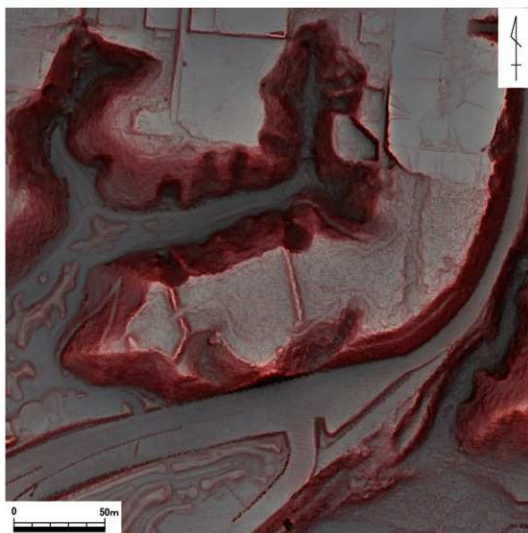
他にも、三木城攻めの織田方の付城跡について、発掘調査されたにも関わらず概報のみのものや、それすらもないものもいくつか見られる。これらについても、できる限り報告書を順次刊行していきたい。

金松 誠

图 版



明石道峯構付城跡 空中写真 1996年6月5日 国土地理院撮影 CKK961-C6-7



明石道峯構付城跡 赤色立体地図
(兵庫県 50 cm DEM データを使用し、三木市教育委員会作成)



T 1 完掘状況全景
(北から)



T 1 西壁土層断面
(北東から)



T 1 テラス部分
西壁土層断面
(東から)



T 2 北壁土層断面
(南から)



T 2 北壁土層断面
(東から)



T 3 横掘土層断面
(北東から)



T 3 完掘状況全景（北西から）



T 3 完掘状況全景（南東から）



T 4 北壁土層断面（東から）



T 4 北壁土層断面（南西から）



T 5 検出状況全景（北から）



T 5 西壁断ち割り土層断面（北東から）



T 5 検出状況
(北西から)



T 6 上段テラス
検出状況
(南西から)



T 6 南西壁土層断面
(南東から)



T 6 南西壁土層断面（北から）



T 7 完掘状況全景（南西から）



T 7 西壁土層断面
(東から)



T 8 横堀・堀切
土層断面
(北西から)



T 8 横堀土層断面
(北東から)